3　講演の要旨

「親子をつなぐ絵本の魅力～絵本づくりをとおして～」

絵本作家　山口　マオ　氏

(1)　はじめに

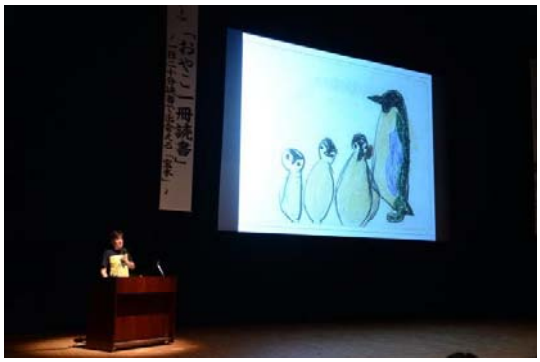
はじめまして。山口マオと申します。普段行う会場よりも，かなり立派な会場でみなさんとの距離が気になるので，それを縮めていくのを第一の目標に頑張りたいと思います。

今，原口館長から紹介がありましたように，私は，千葉県南房総市の南の先端に住んでいます。生まれたのもそこです。子育ては東京で５年くらいして，その後，郷里に戻ってきて子どもを３人育て，今は一番下がもう二十歳になっていますので，みんな成人しています。子育て時代というと20年以上前の話ですので，ずいぶん前になりますが，それもふまえてお話ができたらと思います。

それから，絵本の話に関しては，つくり手としては，絵を描き始めて30年以上になりますが，絵本のことは多分ここにいらしているみなさんの方が詳しいと思います。そこで，私は「子育て時代にこんな絵本を読んでいたよ。」ということをお話できたらなと思います。よろしくお願いします。

この中で，普段から読み聞かせ活動をしていますという方，ちょっと手を挙げていただけますか。かなり多いですね。実は私のお話会というのは，参加型といいますか，みなさんに読んでいただくということが発生しますので驚かないでください。ただし，読んでいただくとお土産がつきますので楽しみにしていてください。

(2)　イラストレーターになったきっかけ



これは私が，幼稚園の時に描いた絵です。私は昭和33年生まれで田舎で育ったので，１年保育だったんです。ですので，おそらく５歳から６歳くらいの時に描いたペンギンの親子の絵だと思います。これも同じく幼稚園の時に描いたものです。近所の時計屋さんにみんなで見学に行ったときの印象を描いた時計屋さんの絵です。この２点は，なかなかよかったのでとってあります。私には子どもが３人いまして，一番上の子は27歳でドイツに行って絵の勉強をしていますが，その子よりちょっといいかなという気がしています。私は子どもの頃から，絵が大好きでしたし，上手いと自分で勝手に思っていました。でも，小学校に上がるともっと上手い子がいるのです。そういう上手い子っていうのは，実は，絵も上手くて勉強もできてスポーツもできてというように，ちょっとなんか嫌なタイプみたいな子たちです。でも，そういう子たちは中学・高校になると絵は一切描きません。だいたい絵を描き続けるというのは，よっぽど変な子で，私はその変な子の一

人でした。

中学時代は運動部に入ってテニスをやっていたので，あまり絵は描いていませんでした。けれども，テニスの成績もあまり芳しくなかったので，高校からはまた美術をやり始めました。美術はその時の顧問の先生が，美術準備室を自分のアトリエのようにしてイタリアの風景とか，タヒチの女とかそういうのを100号くらいの大きな油絵で描いていました。当時は禁煙のムードが全くなかったので，キセルたばこを優雅に吹かしてカンカンとやったり，ストーブで焼きサンドを作って御馳走したりしてくれました。なんか「美術の先生はいいな。」と思って美術の先生を目指すようになったのです。それで美術大学へ進んで，頑張ろうと思っていたのです。会場のみなさんで学校の先生の資格をもっている方はいらっしゃいますか。結構そこそこいますね。相当素晴らしい人たちです。学校の先生の資格を取るには，教育概論とか，なんとかかんとかいう四字熟語みたいな必修科目の授業が５つ，６つあるのです。私は，それを取るのが非常に苦痛で，絶えられなく断念させていただきました。教育実習だけは行きたかったのですが，教育実習だけ行っても何にもならないということで，先生になるのはあきらめたのです。しかし，先生をあきらめると，美術大学の学生というのはほとんど就職する道がないのです。私たちのクラスは50人いて，就職した人が５人いました。３人は学校の先生，あとの２人はそういう専門学校の事務みたいな職，あとの45人は不明で，就職率10%でした。今年は少し就職率が良いようですが，美術大学は，今も就職率は悪いと思います。そのようなわけで私も就職はしなかったのです。そしてイラストレーターという職業を目指すことになりました。

実は，私は大学当時からバンド活動をやっていました。美術と音楽と両方頑張っていたのです。妙なバンドでしたが，せめてデビューはできないまでもレコード一枚出すくらいまでは頑張ろうと，オーディションを受けていました。その時に一緒になったのが，米米ＣＬＵＢです。米米ＣＬＵＢは当時からすごくて付き人がいました。控室で当時はカールスモーキー石井，石井竜也さんですが，彼なんかメイクを女の人が綺麗にやってくれていました。米米ＣＬＵＢもかなり変なバンドなのですが，ぼくらはもっと変なバンドでした。米米ＣＬＵＢが審査員特別賞になり，私たちはイロモノとしては２番目ということで，彼らはデビューして，私たちはもう暗闇の中へ消えてしまいました。それでもう，イラストレーターとして頑張るしかないということで，なんとかしようと思ったのです。

その頃，結婚の話が浮かび上がりまして，当然ながら私は無職だったのです。相手が徳島の人で，なんとか向こうの田舎の親に納得してもらわなくてはならない。どうにかしようと思いました。２か月に一回出ているイラストレーションという雑誌があるのですが，それにチョイスという投稿のオーディションがあるのです。それに入選すると，顔写真と作品とプロフィールと住所，連絡先が出て，事実上デビューできるというものに応募したのです。飯野和好さんという絵本作家さんがいるのですが，彼が審査員で，とてもいい人で，一回目から私を入れてくれたのです。それで写真と作品を田舎に送って，「ほらこういう人で，これから活躍する人だから。」というようなことを言ったら，「だいぶ怪しいけどしょうがないか。」ということで許してもらって，結婚しました。

その年に，もう一回チョイスがありました。私は，うっかり木版画で応募してしまったのです。それは，猫とおじさんが腕相撲をしている「うでずもう」という作品で，デビューのきっかけになったものです。私は，いつの間にか木版画イラストレーターとい

うことになってしまい，どの仕事も木版画でしなければならなくなったのです。木版画っていうのはみなさん御存知のように大変面倒くさいのです。絵を描いて，下絵をトレーシングペーパーに写して，それをこういう版木（これは『わにわにのごちそう』の版木ですけど），こういうのに写して，色数分だけこういうふうに彫って，それで刷るのです。大変手間がかかり面倒くさいのです。それで，イラストレーターとしてデビューしたのですが，ちょうどこれくらいの時に長女が生まれました。その当時，よく読んでいたのが，みなさんもよく御存知の『てぶくろ』や『おさるのぼうしうり』や『ぶたぶたくんのおかいもの』。これなんかかなり好きでした。それから『じごくのそうべえ』，これは田島征彦さんです。後は，せなけいこさんの『ねないこだれだ』。それから，片山健さんがほとんどデビューに近い頃に描いていた『どんどんどん』です。これは，あまり売れなかったようですが，家では非常にヒットしていて，よく読んでいました。私は，小風さちさんと『わにわにのおふろ』などをつくったのですが，小風さちさんとは知らずに読んでいたのが『ちいさいときはなんだった？』という絵本でした。それは面白くて家では結構人気がありました。あとは，『三匹のやぎのがらがらどん』や『ぐりとぐら』。このへんは，王道な感じです。でも，どちらかというと，私自身が好きな本を読んでいました。私がしつこく読んでいると子どもたちもだんだん好きになるのです。私は，あまり好きでないのをリクエストされて読んでいると，途中で寝てしまうのです。みなさんもそういうことはあると思うのですが，そうすると子どもが怒ってしまって大変なのです。自分自身の成長期で絵本というのを考えると，ほんとにオーソドックスな『花さかじいさん』とか『うらしまたろう』とか『ももたろう』とか『赤ずきんちゃん』とか『かちかち山』とか，そんなものしか家にはありませんでした。例えば福音館書店の『こどものとも』は創刊されていたので，あったはずですが，南房総の田舎の先端の方までは行き渡っていなかったのです。だから『こどものとも』は，一切見た記憶がありません。幼稚園も『キンダーブック』で，自分の成長期には，良い絵本にはあまり出会えなかったような気がします。

(3)　どのようにして絵本がつくられるか

もともと自分は絵本の道に進むとは一切思っていなかったので，子どもを育てている時代にも自分がよもや絵本を描くということは考えてもいませんでした。お話が書けて絵も描けて初めて絵本作家だと思っていたので，自分には無理だと思っていたのです。今になって気がつくと，世の中に出回っている絵本の半分くらいは，絵と文章を別の人がかいているのですね。文章は文章，絵は絵。児童文学の方というのは絵は描かないので，絵描きさんの役割というのは，案外絵本にとって大きいのです。最初に絵本に関わる仕事を頼まれたのは，『おおきなポケット』という絵本雑誌でした。仕事を始めて10年目くらいにある編集者に頼まれてやったのがきっかけだったのです。これをちょっと読んでみたいと思います。

（山口マオ氏が『わにのはなし』の朗読）

これは，すごく分かりやすい話です。途中でクスクスと笑いが聞こえてきたのですがそういうのは非常にありがたいですね。実は全国に行っていると，特に日本海側に行くと非常にみんなシャイで一切笑ってくれないのです。そうするとなんとなく緊張感が出

て,いつまでたっても客席との距離が縮まらないという非常に寂しい思いをするのです。でも，今日は，ちょっと心強いです。

これがきっかけで，次に『わにわにのおふろ』という絵本ができるのです。なぜこれがきっかけになったかというと，いろんな偶然が重なったからです。この絵本を描いた二年後くらいに，東京の練馬区にある石神井公園でワニが出た騒ぎがあったのです。それでワニを目撃した人がいて，テレビで報道されました。その後，例えばワイドショーや一般の人たちがワニを探しに行ったのですが，結局見付からずに，世の中からワニの話は消え去っていったのです。その中に，次の「わにわに」の作者の小風さちさんも近所に住んでいて，探しに行ったらしいのです。そしたら見付からなくて，他の人は忘れ去っていったのに，小風さちさんだけがどうもワニにとりつかれてしまったのです。普通の夜道を歩いていると後ろからワニが「ずりっずずっ」とついてくるのではないか，お風呂に入っているとそのへんにワニが潜んでいるのではないかという妄想を抱くようになったらしいのです。それから伊豆の熱川の「バナナワニ園」に通うようになって，ワニの生態を研究するようになったらしいです。「ワニは何を食べますか」とか，「ワニはどんな暮らしをしているか」とか飼育員の方に聞いていたらしいです。

まず，何を食べると思いますか？お肉？ちょっと聞いてみようかな。

「ワニは何を食べると思う？」

「お肉？」

「何肉？」

「豚！」

「豚・・・・。豚ね。」

「何を食べると思う？」

「ん～。」

「はい，時間切れ。」

「何を食べると思う？」

「鶏肉！」

「ピンポン。鶏肉です！！」

一回に，自分の頭の大きさと同じくらいの鶏肉を丸ごと食べるそうです。だからちょっと大きなワニだと，丸ごと３個も鳥を食べるのです。でも２週間に一回しか食べないそうなんです。かなり省エネな動物なんです。そのかわり動物園に行っても，ほとんどじっとしていて，ほとんど動かないので，あんまり面白くありません。色も土色とか，グレーとか，かなり地味なのです。

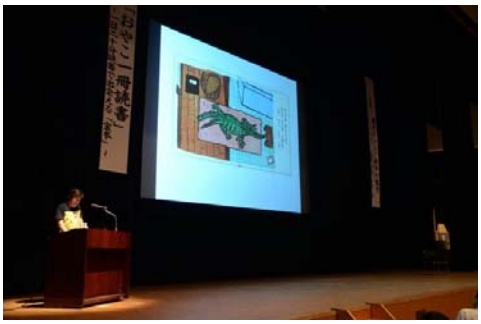
小風さちさんは仕舞いには，飼育員の方に「ワニは蛇口をひねれますか。」と妙な質問をするようになったそうです。その頃からこの『わにわにのおふろ』のお話を考えていたそうです。「蛇口をひねれるか。」という質問に関しては，「実はワニは前足が５本指，後ろ足が４本指ですので，理論的には蛇口をひねることはできます。しかし，実際に蛇口をひねるワニは見たことがないです。」という答えだったらしいのです。

その後，この『わにわにのおふろ』のお話ができました。小風さちさんが，『こどものとも年少版』の編集部にこの話を持って行ったところ，たまたま運命的に以前お世話になった編集長が，こちらの年少版の編集長に異動していたのです。それで，『わにわにのおふろ』をつくろうという時に，「じゃあ，誰に描いてもらおう。」ということになったそうです。そこで，福音館書店にあったワニを描いている絵本を十冊くらい全部

持ってきて，一人ずつ見ていったらしいのです。一番下に正式な絵本ではないですけれども，この『わにのはなし』もしのばせておいてくれたらしく，一番最後にこれを見たときに小風さちさんが「あっ，このワニです。」って言ったらしいのです。何がこのワニなんだかわかりませんが。というのは，洋服を着たようなキャラクターのようなワニではなくて，ゴツゴツした動物らしいワニでいきたいということで，このワニがイメージのワニにぴったりだったのです。それで，私が『わにわにのおふろ』をやることになりました。

ついにここで，みなさんの出番です。『わにわにのおふろ』これを，読んでくださるという方いますか。この辺に「はなさき山」というチームエプロンをしているメンバーがいらっしゃいます。この方たちは，どなたに言っても多分大丈夫ですよね。今自信をもってうなずいてくださった方，お願いします。

（会場の方が『わにわにのおふろ』を朗読）



最初は緊張するかと思いますが，堂々とした朗読で素晴らしかったです。ありがとうございます。この『わにわにのおふろ』は，私にとっては三冊目の絵本です。ほとんど初期の絵本で，絵本というものがどんなものか全く分かっていなくて，必死になってやっていただけだったのです。ですからこの絵本ができたときに，これが全体の中でどうなのか，あまり客観的に見られなかったのです。あとあと聞くとこの絵本は，今まで出ていた絵本とちょっと何かが違ったらしいのです。「うん，うん」とうなずいている方は，そうだと思っていらっしゃるんだと思いますが，ちょっと聞いてみますね。

「どの辺が今までとちょっと違った感じだったのでしょう？」

「ワニがお風呂に入るなんて，信じられませんでした。」

「絵があんまりかわいくなかった。」

「率直な意見をありがとうございます。」

どちらも正解だと思います。そういうのがあって，福音館書店に苦情の電話が来たそうです。どこかの館長さんか，園長さんか，おじさんから「私は福音館書店の絵本を50年近く読んでいるけれども，なんて下品な絵本をつくるようになったんだ。」と。その時の担当者が，「この絵本はそんな下品な絵本ではありません。」と言って対処してくださったそうなんです。今になって思うと，その方の言うことも少し分からなくはありません。

この絵本は，お風呂に入るマナーを教える絵本だと仮に勘違いして読むと，大変なことになります。まず，少し気持ち悪い，かわいくないワニが，昭和の香りのするお風呂に入ってくるというだけで少し気持ち悪いですよね。でも，お湯をためて，おもちゃがあるとリラックスして入れるのは，子どもさんたちも同じですので，これは良いのです。次に，お風呂によじ登り，「じょろろーん」と。これがいけないのです。できれば，体を洗ってから。少なくともお湯で流してから入ってもらいたいのですが，何もせずに頭から入っています。これはもう，「ブッブー」ですね。もう入ったのだから仕方がないということで，おもちゃで遊んでいます。そして体が温まったので，石けんで体を洗う

のかと思いきや，「ぷーぷー　ららら一」と言って，あぶくを飛ばして遊んでいます。今度は，お風呂場はエコーがきいて歌が上手く聞こえるものだから，シャワーヘッドをマイク代わりに「うり　うり　うり　うり　オーイェー」と言って，歌を歌います。この時に，頭に洗面器を置いていますが，この角度だと必ず落ちます。そうすると洗面器が割れたり，タイルにひびが入ったりろくなことはありません。これもよくありません。そして最後にお湯にもぐってじっと温まります。もう最後かという感じなのですが，先ほど「ぷーぷー　ららら一」と言って石けんで遊んでいて，お湯で流した流した形跡が全くないのです。するとこのお湯はもう，この後誰も入りたくないようなワニ汁になっているに違いありません。そしてお湯から出ると，体をふいて，後片付けもしないで，わにわにはお風呂から出て行きます。「わにわには　おふろがだいすきです。」って。それは大好きでしょう。これくらい好き勝手していたら…。お風呂に入るマナーを教える絵本としては，最悪中の最悪で，とんでもありません。その後，私と小風さちさんとでこの話をした時に「子どもたちって親がいないときにお風呂に入ったらきっとこんなもんだよね。」という話になったのです。私もよく父親に耳の後ろを洗うように言われていたのですが，なんで耳の後ろをよく洗わなければならないのかよく分からなかったのです。でもやっぱり親が見ていないと，つい背中を洗わなかったりしますよね。よっぽどできた女の子でないかぎり，ほとんどの子は流さないでお風呂にドボンと入ったりします。そのへんを小風さちさんはよくわかっているんだなという気がしました。

実は小風さちさんは，御存知かもしれませんが，福音館書店の創業者の一人の松井居さんのお嬢さんなのです。まあ，言ったらサラブレットで，育ちのいい方なのですが，どちらかというと逆にこういうことに憧れていたのでしょう。私はもともとこういうタイプの人間なので，そのコントラストがよかったというか。私はこの絵本をつくったときは，小風さちさんが，松井さんの娘だという事実は知らなかったのです。そのようなわけですから，対等におつきあいをして，絵本をつくっていったのです。

そんなふうにして，次にできたのがこの『わにわにのごちそう』というテーマです。私たちの頃は，外遊びとか，木登りとか，鬼ごっことか，そういう遊びがメインでした。テレビゲームはなく，せいぜいレゴぐらいがいいところでした。最近の子どもさんたちは，アニメとか，ゲームとか，そういうバーチャルな遊びがほとんどです。ですから，もう少し本能に訴えかけるような絵本がつくれないかということで，本能＝食欲，食欲＝肉のような絵本をつくろうと思い，この『わにわにのごちそう』ができたのです。これを読んでいただける方いますか。ありがとうございます。

（会場の方が『わにわにのごちそう』を朗読）

この『わにわにのごちそう』という本は，初めて「わにしょうゆ」というのが出てくるのです。「これ何ですか。」って，時々言われます。これはワニを煮出した醤油ではなくて，「わにしょうゆ」ラベルの醤油ということです。私は将来「わにしょうゆ」ラベルのお醤油を出す野望があります。ですから，これをちょっとずつ，これ以降の本には，必ずどこかに「わにしょうゆ」が出てきます。わにわには，いつもエプロンをして料理をします。おなかがぺこぺこなわにわには，冷蔵庫の肉を見つけると，「肉は絶対離しません。」というような感じで，「じゅう　じゅう」とフライパンで焼くのです。この絵本ができたのは，13年から15年くらい前で，まだＩＨがなかった時代です。絵の

中には，実際に使っていたテーブルやものも結構出てきます。「あついぞ　あついぞ　ふう　ふうの　ふう　いただきます」このときに，下にプチトマトがあるのを見ておいてほしいのです。そして，「がふっ　がふっ　がふっ　むちゃ　むちゃ　むちゃ」この時も下にプチトマトがあるのです。「ぐびっ　ぐびっ　ぐびっ」この時もあるのです。「しー　しー　ちー　ちー」やるときもあるのです。

これはどういうことかというと，わにわには，プチトマトを食べ物とみなしていないということです。食べ物と思えば，拾ってでも食べます。だけど，食べ物と思っていないのです。どういうことかというと，実は作者の小風さちさんもトマトが大嫌いなのです。とりわけプチトマトが嫌いで，あんなものは人間が食べるものではないと言って食べないのです。その小風さちさんをちょっと皮肉るためにプチトマトをあしらって，表紙にも大きなトマトに入ったワニがいるという，そういう感じの嫌がらせに近い感じの本をつくっています。実は，小風さちさんという方は，文章がシンプルなのが特徴なのです。でも，削って，削って，これ以上削れないくらい少ないのです。例えばこれなどは，私のところへ来るときにはラフはなく，文章しかないのです。そうすると，ここは「がふっ　がふっ　むちゃ　むちゃ」だけしかこないのです。それからここは，「ぐびっ　ぐびっ」しかきません。もっとひどいと，「じょろろん」しかこないのです。それでなにか絵にしなければならないので，結構大変なんですね。なぜこのようになっているかというと，小風さちさんの場合は，絵描きさんが表現できる部分は，文章で書かなくてもよいのです。文章と絵がうまくミックスして，進行してきた場合，一番良いかたちになると考えているのです。これも「ぐびっ　ぐびっ　ぐびっ」しか私のところにきません。普通なら「ぐびっ　ぐびっ　ぐびっ　とわにわには，肉を飲み込みました。」とか，そういうことになるのです。さすがに，このへんは演出が必要です。「おなかがふくれると，わにわには　つめで　きばを　そうじします。」これは，「しー　しー　ちー　ちー」だけではだめなのでしょう。よくわかりませんが，何かがあるのでしょう。そして，こんなふうにしてできたのが『わにわにのごちそう』です。

次に『わにわにのおでかけ』という作品があるのですが，これは千葉県の鴨川の花火大会を小風さちさんが見に行った時にできたお話だそうです。ところで私は，大学生の頃から薩摩琵琶をやっていました。本当は薩摩琵琶を持ってきたかったのですが，一人分席を確保しないと，飛行機に乗せてくれないのです。普通にスーツケースと一緒に流すと，壊れてしまうので，今日はそのかわりに，知り合いがつくった大きなひょうたんでできた三線，三味線を持ってきました。今日は，琵琶のかわりにこれを使いながら語りをやってみたいと思います。使うバチなんですが，こういう大きなバチがあると，ちょっと変わった演出ができます。それを楽しみに見てください。

（山口マオ氏による『わにわにのおでかけ』の弾き語り）

これが薩摩琵琶でやるとだいたい３倍くらいいい感じになると思って，想像して聞いてください。機会があったら，今度は薩摩琵琶をもって，隣の席に琵琶を置いて来たいです。

次に『わにわにのおおけが』というのができたのですが，その前にこのお話にまつわる話をちょっとだけしましょう。この時に初めて「わにわにの家」というのが公開されました。わにわには，案外小さい昭和を感じさせる家に住んでいるのです。意外にも花

柄のかわいい布団で寝ています。そして，人々について行くのです。この時に犬が出てくるのです。最近，『あむ』という絵本が出たのですが，その「あむ」ですかと聞かれます。「あむ」ではなく，前に飼っていた先代の「ムンク」という犬なのです。

去年出た『あむとあおいリード』に，「ムンク」は出てきます。橋を渡ってお祭りの会場に行きます。一番右に「スナック華恋」という提灯があります。これは千倉にある私の同級生がやっているスナックです。その隣にある「ぶんざ」は，三味線民宿と言われているところです。食事が終わるとおばさんが「もう，そろそろよろしいですか。」と来て，強引に三味線を聞かされるところです。それから「伊乃松」というのはお店ではないのですが，私の実在していたもう亡くなったおじいちゃんの名前を特別出演で出しました。そのとなりの「わにしょうゆ」は，わにしょうゆプロジェクトの一環としてやっています。「たびしょう」というのは洋品店で，昔は足袋を売っていたのです。今は何でも売っています。その隣の「らんぷや」というのは，昔はランプを売っていたのです。今はのりや乾物を売っています。そしてここに「白鯨亭，小間惣，リプロス・・・」全部，実は千倉に実在するお店で30軒ぐらいあります。これを書いたのには理由があります。この本が出た暁には一軒が10冊くらい買ってくれるだろうと。そしたら，300冊くらい売れるぞ，ということで書いたのですが，誰も買ってくれませんでした。ひどい人は，自分の家が載っていることすら知らないのです。

ここでちょっと，わたあめに注目してもらいたいのです。このわたあめ屋さんのおじさんの顔が真っ黒なのですが，実はここを見るとお店のおじさんたちが全部黒い人なのですね。ちょっと不気味な感じです。それがちょっとおもしろいです。向こう側を向くと，このお店のおじさんも顔が黒いのです。「おいで，かわいいきんぎょちゃん。」と言っていますが，「この後金魚をどうしたんだろう。」と思いませんか。

わにわには，「はなびがはじまりました。ひゅぅーどーん！どどーん！」と言いながら帰って行くのですが，この時にヨーヨーを持っているのです。このヨーヨーをどうしたのかということが問題になるのです。ここにヨーヨー屋さんがあります。ここからどうにかして身に付けてきたであろうということは想像できるのですが，これをおじさんにもらってきたと思う人，手を挙げてもらえますか。では，買ってきたと思う人。結構いますね。では，盗んできたと思う人。一番多いですね。これも地域性が出ています。盗んできたという人がほとんどいないところもあります。やはり，おおらかな土地柄なんだろうな，という盗む人もまあ許そうという，そういうおおらかな気持ちがなんだか表れているような感じがします。正解は，盗んできたのではありません。ここにヒントがあります。隣にお財布があります。しかもよく見ると，表紙でお財布を持っているのです。ということは，お財布持って行ったらしいということがわかります。しかし，その後は，どう見てもお財布が見当たりません。そしたらある地域の小学生が，「わにわには口の中にお財布を入れていたのだよ。」と言ってくれました。「ああなるほど。」，とそれ以来，私は納得して，もうそういうことにしています。わにわには，どうやらなけなしの百円を出して，おじさんからヨーヨーを買ったのではないかと思います。そしてここで，ヨーヨーを持ったまま寝てしまったのです。一番最初のシーンと同じ部屋で

寝ているはずですが，何かが違います。ここを十秒間見て覚えてくださいね。で，最後がこれ。「何が違いますか。違うところが分かる人？」そうです。壁が最後のシーンは砂壁みたいになっているのですが，最初のシーンは木目があるのです。なぜでしょうか。イリュージョンですかね。実は，私が木目を描き忘れたのです。他にもう一つ違うところがあります。確かに蚊取り線香が小さくなっています。でもこれは，時間が経ったと言うことです。間違いではないです。「分かる人いますか？」「ランプ？」，申し訳ないですが，この時はランプが見えているのです。ちょっと見ている角度が違っただけで，ランプはあるのです。残念。他にいますか。「畳」，正解です。最初のシーンは布団の下に畳の縁があるのに，最後のシーンでは畳の縁がなくなっているのです。一体，どれだけ大きい畳なんだと思うかもしれませんが，これも，畳の縁を描き忘れてしまったのです。これは非常に珍しくて，普通は出版するときに，編集者の人が気付いて，「描き足してほしい。」と言われるのです。私の場合は版画なので，描き足すのではなく，そこをつくり直させられるのですが，このときは時間的にギリギリだったため，編集者の人も気が付かなかったのです。

次に『わにわにのおおけが』ができたのですが，これは，なかなかの事件で，大変面白いのです。これを読んでくださる方，いらっしゃるでしょうか。

（会場の方が『わにわにのおおけが』を朗読）

先ほどこの絵本は事件だと言いました。わにわには，大けがでもないけがをして大げさに包帯を巻いたのですが，この本をつくる２年くらい前に私は，大けがをしました。版画は版木を彫ってつくるのですが，板を切るために大きなカッターで５回くらい裏表を切るのです。その時に私は指を切ってしまいました。人差し指のここから親指まで。これがちょうどその時に使っていたカッターです。それでまずいということで，近くにあったティッシュかタオルで止血をしました。頭の上にのせて，心臓より高く上げると血が止まるので，止血をしながら，作業をしていたのです。普段は５分くらいで止まるので，見ていましたが血がドクドクドクと出続けていました。「今日は止まるのが遅いな。」と思いながら作業をしていましたが，20分経っても変わらなかったので，これはいつもと状況が違うと思ったのです。その日は，お正月で病院が休みでした。家族もいなかったので，私はこの状態で車のエンジンをかけて，片手運転で救急病院へ行き，看てもらいました。たまたま外科の先生がいて，「なに，靱帯が切れてブラブラじゃん，このままだと使えなくなるよ。」と言われて，緊急手術をすることになりました。カッターで切ったので破傷風が怖いので，まず，麻酔の注射を打ってもらいました。それから，看護師さんが水道で，魚の切り身を洗うように傷口を丁寧に洗ってくれました。破傷風は水で洗うのが一番大事らしく，水気を切った後に先生がブラックジャックのレンズのようなものをつけて，靱帯を縫って，お肉を縫って，皮を縫ってというように，手術を何段階もしてくださいました。『わにわにのおおけが』のような状態の指になったのです。

私は「マオニュース」という新聞を年４回出していましたので，それにそのときのルポを書いたら，小風さちさんが「しめしめ」とばかりに，先ほどのプチトマトの逆襲とばかりに，これを絵本にしたのです。それでこれができたのです。その時に，私のところに「画家さんのアトリエを見せてもらえませんか。」と電話をかけてきたのです。私

のアトリエはひどく散らかっていて，絶対に人を呼びたくなかったので，「アトリエはひどくて人には公開していないのです。」と言いました。すると「ちょっとでいいですから。」と諦めてくれません。「じゃあ２秒でいいですか。」と言ったら「はい。」と言うのです。「明後日来てください。」と約束したので，翌日に片付けようと思っていたのです。でも，全く片付けられずに約束の日が来てしまいました。小風さちさんは，２秒ではなく，５秒ぐらい覗いて，「分かりました。」と帰っていきました。それで，「おや？ずいぶんと　ちらかったへや」という失礼なセリフが出来上がりました。『わにわにのおおけが』で，わにわには，「きって　きって　きっ！」「うおぉ！」と指を切ってしまうのです。しかし，さっき言ったように私はカッターで切ったので，最初はこのはさみではありませんでした。最初のラフは，こんな風にカッターで切っていました。これが最初のラフなんです。「うおぉ！」ってカッターを，ちょうどこれですね。これがこう「うおぉ！」って投げ出した感じです。最初はこれでいくはずだったのです。すごい迫力で良いですよね。ところが編集会議で，カッターをやめて，学童用のはさみでちょっと切ったことにしようと決まり，このようになったのです。なぜかというと，『わにわにのおふろ』で，「うり　うり」とか「ぐにっ　ぐにっ」とか真似をする子どもたちが結構いたらしいのです。『わにわにのおおけが』で大けがごっこが流行ると，事故が起きてとんでもないことになるということで，学童用のはさみが良いということになったのです。

最後に出来た絵本がこの『わにわにとあかわに』です。これは，いろんな会場で女の子がいると女の子に読んでいただいています。「女の子でこれを読んでもいいよという人いる？」「読めるかな？」「読めなかったらお母さんが応援になるよ。」「よし。」「頑張ってみようか。」「はい，チャレンジしてみよう。」「お願いします。」

（女の子が『わにわにとあかわに』を朗読）

なぜこの本を様々な会場で女の子に読んでもらうかと言うと，意外にこの本は女の子に人気があるからです。あかわにが「妹みたいでかわいい。」と言うのです。一番人気があるのは，『わにわにのおふろ』ですが，その次は，『わにわにのおおけが』や，この『わにわにとあかわに』です。これは一応，今出ている最後の絵本です。最初は，誰もいない部屋で居眠りをしていたわにわにが目を覚まします。その時にけん玉が置いてあるのです。けん玉で一人で遊んでいるうちに寝てしまったのかもしれません。部屋を出て廊下を歩いていると，納戸みたいな所から突然，あかわにが出てくるのです。これに対して，私はつくる時から今一つ納得できなかったのです。「どうして納戸にあかわにがいるのか。」「今までわにわには一人で暮らしていたはずなのに。」「ここに誰か下宿みたいに間借りして入るようになったのか。」「侵入してきたのか。」「ここに卵があってワニが孵ったのか。」など，どうも納得がいかなかったのです。この展開を見ると初めて出会ったような雰囲気なので，ずっと不可解だったのです。

それで，描いたラフがこのような怪しげなあかわにが潜んでいて，わにわにの後をついてくるというものです。私は一番最初はオカルトチックなラフを描いていたのです。

ある時，私の疑問に対して，『わにわにのおふろ』でお世話になった元編集者が，本の感想を送ってきてくれました。それには，『わにわにのおふろ』が，小風さちさんの妄想から生まれた絵本だとしたら，この『わにわにとあかわに』は，わにわにの妄想から生まれた絵本ではないかと書いてありました。わにわにの妄想とは，「いつも一人でお風呂に入ったり，御馳走を食べたり，工作をしたり，散歩に行ったりと，いろんなことをして楽しかったけど，友達と一緒にそういうことが出来たらどれだけ楽しいだろうなと思っている。」ということです。わにわにが，いつも一人では寂しいですね。そんなわにわにの妄想から生まれたのがこの絵本ではないかということです。

それでそのヒントになることが，月刊誌にはないのですが，単行本にあります。ここに，「おわり」と入っているのです。単行本化するときに小風さちさんはここに「おわり」という文字を入れさせてくださいとお願いしました。普通は最後のページに「おわり」と入れるのですが，ここに入れたいと言うのです。それで結局押し切られてしまいました。今になると私はその理由がなんとなく分かったような気がします。小風さちさんから，一番最初のページのけん玉とあかわにの赤を同じ色にしてほしいと言われました。最初にけん玉があって，それがこっちに憑依して，それであかわにが出てきたということなのです。そのあかわにがついてきたので，わにわにが大好きなプリンを食べさせようと思ったのです。食べるか気になるため，手元がおぼつかなくてミルクをドボドボとこぼしますが，その後「たべたぞ，たべたぞ。」と喜んでいます。この時にあかわにの顎のところにプリンのカスがついているのですが，これは小風さちさんから，ここにカスを付けてほしいと細かいリクエストがあったのです。今度はお風呂をためて泳ぐかなと思っているうちに，あかわには自分から洗面器の中に入ってきました。それをそおっと持ち上げてお風呂に入れてあげようとしたら，自分から「ぴしっ！しゅるるん」と飛び込んでしまったのです。それで見事に泳ぐのです。わにわにも一緒に潜りました。お風呂から出ると並んで体を拭いて日向ぼっこをしました。この時に口が開いてるのは，ワニは毛穴がなくて，体温調整ができないからです。それで口を開けて，体温を調整しているらしいのです。そして，「いちばんぼしがひかりました。あかわには，カシャカシャかえってゆきました。おわり。」となって，「コンコンチャ　コンコンチャ」と現実に戻るのです。最後は象徴的にけん玉が出てくるのです。要するに，この「クイっ，だれっ？」いうところからここまでが非現実の世界なのかもしれません。その辺は，小風さちさんは私や編集者にもあまり説明しないのです。説明してしまうと逆につまらないというか，ひょっとしたら小風さちさんも確信していないので，気配みたいなものを絵本に描いているのかもしれないのです。あまりこう分かり切ってて描いてるというより自分でも模索しながらつくっている部分があるのだと思います。ちょっと謎めいた絵本で，わにわには今のところ終わっているのです。

いろんな会場で，「わにわにはもう出来ないのですか？」と聞かれます。出来ないことはないかもしれませんが，取りあえずすぐには次は出ないと思います。実は今『わにわにのカルタ』をつくっています。文章も新たに小風さちさんが書いていて，絵も私が50枚つくります。来年の９月ぐらいに出す予定で進めています。まだ１年先の話ですが，ちょっと楽しみにしておいていただけたらと思います。

その後に，この『あむ』という絵本が出来たのです。主人公の「あむ」というのは実は私が，10 年ぐらい前に飼っていた犬です。ラブラトルレトリバーという種類の真っ黒い犬だったのです。家に取材に来た時に小風さちさんは，この大型犬の「あむ」に「ど

ん」とどつかれたのです。小風さちさんは，自分の家で小型犬を飼っていたのですが，このとき，こんな猛獣のような犬がいるのかと驚いたそうです。そして，これを絵本にしたいということでつくったのが，この『あむ』という絵本です。この二作目の『あむ』というのが去年の夏に出来たので，これを読んでみます。

（山口マオ氏が『あむ』を朗読）

これもちょっと変わった絵本です。以前私が飼っいて数年前に亡くなった「ムンク」という犬が，お盆にあの世から帰ってくるという話です。人間の話だったら，かなりおどろおどろしくて，恐らく絵本としては実現しなかったかもしれません。でも犬ということで，こういう話に出来上がっているのです。このときに変な呪文を唱えている「やんごめくいくい」というのは，私が住んでいる南房総で実際にやられている風習です。ちなみに「やんごめ」というのは「焼き米」のことです。迎え火と送り火を辻々で稲わらを燃やして，みそはぎの葉っぱで水を呑み，仏様に焼き米と水を捧げます。そして，この灯りを頼りに「早くいらっしゃい，いらっしゃい。」と言います。迎え火の時は，午後４時くらいの明るい時にやるのですが，送り火の時は，夜のちょっと暗くなった頃にやります。こちらの方では送り火，迎え火はどのように行いますか。提灯ですか。やはり地域によって地域差がありますね。灯籠流しみたいにしたり，お盆の上で小さな迎え火をたいたりとか，京都なんかは大文字焼きを大々的に山でやったりとか，いろいろな風習があるようです。どちらかというと私のところは，かなり土俗的かもしれません。

ところで，私は，一番最初に絵と文章と両方かいた作品はないと言ったのですが，実は一冊だけあります。赤ちゃん絵本で『でんしゃごっこ』という作品です。唯一私が文章と絵を両方手がけています。これを読んで終わりにしたいと思います。

（山口マオ氏が『でんしゃごっこ』を朗読）

説明するまでもないのですが，ネコさんが電車ごっこを始める話です。そこへイヌくんが「のせてください。」と来ます。その次に，クマさんが来るのですが，体が大きいので，イヌくんは怖いなと怯えてしまいます。それでも一緒に電車ごっこをすることにしたら，次にウサギさんが「のせてください。」と来たのです。ウサギさんなら楽勝だから，「はいどうぞ。」と言いました。残り一人分のスペースがあったのですが，そこへ今度はキリンさんが「のります，のせてください。」と来ました。「はいどうぞ。」と言いましたが，狭いのでキリンさんの足が脱臼するかもしれないと心配になりました。一応入ってもらい，走り出すともうスペースは一切ないのです。そこへトリさんが「のります，のせてください。」と来たのです。イヌくんとネコくんは，「まんいんです。」「もうむりだよ。」と後ろの方を見ました。するとトリさんは，キリンさんの頭の上に乗りました。「めでたしめでたし」ということで，「でんしゃでーす。のりませんか。」とまた走り出すのです。もしこの後，タヌキさんとかキツネさんが「のりまーす，のせてください。」と来たらどうするでしょうか。そしたらクマさんがおんぶするとか，何かしら考えれば，何とかやっていけるかもしれません。つまり，困難に直面しても工夫して切り抜けていこうという絵本なのです。

今後，実は文章の方もやっていきたいのですが，文章を組み立てていくのは，案外難

しくて滞っています。しかし，一年に一冊ぐらいつくっていけたらいいなあと思っています。

(4)　最後に

私がこうやって絵本や絵の仕事を30年近く続けてこれたのは，子どもの時から絵が好きだったからです。でも，よく考えると，子どもの頃，母親が褒めてくれたことが自信につながったからだと思います。私は，５人兄弟の末っ子で一番出来が悪かったのです。上の４人はみんな勉強ができて，わりと優秀だったのですが，私は勉強が嫌いで，あまり優秀ではなかったのです。しかし，絵は少し上手で，好きだったのです。そんな私に母親は，「上手だね。」「まさお（真生）くんは，本当に絵が好きだね。」と褒めてくれました。その言葉が自分の頭の中に残っていて，なにかの自信に繋がっていったのです。だから，お母さんやお父さんが，子どもさんの絵でも歌でも運動でも勉強でも性格でもいいと思うところは，躊躇せずに褒めてあげたら，きっと子どもの自信につながり頑張っていけるのではないかと思います。

これで私の話は終わります。御清聴ありがとうございました。